

F-15 理論食料費試算式とその展開(第2報)

福岡県社会保育短大 ○出石康子 内野由紀子

目的 理論食料費試算式は、さまざまな世帯の特性に合わせて、適用することが必要である。従って今回は第1報で報告した基本式を、各世帯の食料費の特性に応じて変形しうるよう、それら特色の指数化を試み、一応の成果を得たので報告したい。

方法 世帯の特性によって時系列・収入階級別・地方別・所要量別の四種類の食料費の特性を表わす指数を求めた。各世帯の食料費の特色は、物価の変動・収入の変化・消費意識の変化・慣習のちがいなどによって左右されると考えたので、それら因子の質と量について確かめた。その結果、それら因子の食料費変化への影響のし方は、世帯の特性別によって異なることを知ったので、指数作成にあたってこれらのことを考慮した。また食料費の変化は、栄養摂取のための費用部分とその他のための費用部分とでは変化のし方が異なるので、これら2つの部分について別々に指数を作成した。なお基準年として昭和45年をとった。従って、種々の研究の結果、栄養摂取以外の部分に向けられる費用の割合は、安全率を含めて理論食料費の1/10としている。栄養摂取のための費用部分の指数は理論食料費を、その他の部分の指数は、実態食料費を資料としている。

結果 理論食料費算出のための基本式をプログラムしておき、電算機を用いて必要な指数を与えることにより、将来のあらゆる場合の食料費の予測が可能となり、標準生計費試算も容易で適確なものとなって、種々の施策面でも、家庭経営面でも、その寄与するところは大きいものと思われる。